
梓（あずさ）先生の記念写真 ～残念な結末バージョン～

鐵 護

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梓先生あずまの記念写真　〜残念な結末バージョン〜

【Nコード】

N5946V

【作者名】

鐵　護

【あらすじ】

戦前の東京下町を再現したレトロテーマパーク、苦北実験場に勤務する主人公と、単身赴任中に出会った小学校教諭との、少々切ないエピソードです。

建設中の苦北実験場内で、場内滞在者との交流を目的として、場内の私立学校の学園祭が開催されることになった。「イベント企画室」に籍を置く主人公は、学園祭の運営を手伝うことになり、歯並びの悪さを人一倍気にする独身女性小学校教諭、松本梓と知り合う。学園祭の準備は順調に進み、彼女との掛け合いに胸のとき

めきを深め行く主人公だったが…。

(前書き)

このお話に出てくる「苦北実験場」については、当サーバ様内の小説「とまぎた苦北実験場」世にも都合なレトロワールド建設史」を参照して下さい。

私の名は斉藤広保。社団法人産業技術伝承開発機構に在籍し、北海道とまきた苫とま北実証実験場のイベント企画室で課長補佐として勤務している。今回は、堀ノ出学園初等科教諭で、苫北下谷小学校二年二組の担任だった松本梓あけ先生について記す。私が梓さんに初めて会ったのは、実験場建設工事中、単身赴任九ヶ月目で、大火災実験が終了した直後の六月中旬だった。

「今回の企画は、堀ノ出学園関係者と場内滞在者との交流を目的とした、学園祭形式のイベントです。これから担当を割り振るから、担当者は相手方の担当と良く打ち合わせてね。」

イベント企画室の定例会議で、伊部担当課長が、堀ノ出学園と産技伝で共同制作したイベント企画書を手に、役割分担について説明し始めた。伊部氏は、担当者を明確にしてからイベント全体の概要を説明するという、独特の議事進行方法を採っていた。

「初等科と幼稚園は、斉藤ちゃんね。そうそう、斉藤ちゃんは、学園全体のクランクアップの記念写真も手配してね。先方が車坂くるまざか写真館を指定してきたから、そっちもよろしくね。」

会議が終ると、私は早速アポを取り、翌日、堀ノ出学園初等科の苫北下谷校舎となっている、下谷区北稻荷町の下谷尋常小学校にお邪魔した。当時は映画撮影の都合で「下谷桜丘国民学校」を名乗っており、校門には木製の看板が掲げてあった。校舎は、奉安殿を傍らに座らせた鉄筋コンクリート造の堅牢な三階建てで、職員室は一階の西側にあった。北海道の初夏の陽が燦々と降り注ぐ、やや暑い、しかし爽やかな昼下がりだった。

「『苫北堀ノ出学園祭』の初等科実行委員で、松本と申します。」名刺交換での梓さんの第一印象は、気の強そうな人だなあ、だった。白いブラウスに井桁模様のモンペズボンを穿いた彼女は、最初、

あまり笑顔を見せなかった。手短に用件や意見を喋ると口を真一文字に結んでしまい、何か取っ付き難い雰囲気醸し出していた。年齢は二十代後半だろう。身長は百五十五センチ位で、肩まで届く黒髪を後ろに束ねていた。そんな彼女が表情を崩したのは、雑談の中で、子供の歯医者嫌いが話題に上った時だった。

私は歯並びが悪いことから、「歯医者を変える度にそれを指摘されて、肩身の狭い思いをする。」と打ち明けた途端、ぱっと表情が明るくなったのだ。

「えっ、歯並びを気にされてるんですか。」

それまで喋り終わるとキュツと閉じられていた唇が、今度は半開きのままとなった。

「そうなんです。こんな具合に。」

私は梓さんの目の前で「イー」をして、不細工な歯並びを披露して見せた。彼女は、そう大きくない瞳を見開いて私の歯並びを観察してから、嬉しそうに、でも残念そうにつぶやいた。

「確かに、そうですね。私みたいな『スキツ歯^ばアンド出っ歯』よりはマシですね。」

「スキツ歯、アンド、出っ歯。ですか。」

私はキョトンとして、梓さんの口元を見つめた。彼女はこの時、初めて私の前でニツと笑って、その歯並びを公開した。確かに、上顎の歯は不揃いで右上の犬歯の先が極端にせり出していた。そして、下顎側は最前部の切歯を一本欠損したらしく、左右の犬歯の間に前歯が三本、等間隔の隙間を隔てて並んでいた。これを隠そうとするから取っ付き難い表情になるのか、と納得した。

ニツと歯を見せたままの梓さんがあんまり可愛かったので、私はドキドキしてきた。いかん、いかん。単身赴任中の火遊びは、ろくな結果にならないと相場が決まっている。妄想だけにしておかないと。気を取り直して、スタッフ紹介用の写真を撮ることにした。ところが、これが思いどおりにならなかった。

撮影中、梓さんは一切口を開かなかった。しかも、右上の犬歯を

無理して隠すので、口を閉じたまま微笑もうとすると、右の口元が微妙に歪むと同時に、頬から右の目元にかけて力が入るのか、極めて不気味な「笑顔」になってしまうのだった。聞けば、短大在学中の記念撮影で、歯並びを心無い助教教授に指摘されて以来、「歯を見せた写真は二度と撮らせまい」と、心に誓ったとのことだった。

仕方なく、笑顔のスナップは諦めて、資料整理に真剣に取り組む様子を演出して、不自然な口元が目立たぬよう、左斜め前から撮影した。写真は梓さんに検閲してもらってから、産技伝側で制作した学園祭のプログラムに掲載した。

「もし私の口の中をよそに公開したら、その時は責任を取ってもらいますからね。ガチャ歯の斉藤さん。」

写真撮影時には決して見せない、悪戯っぽい笑顔でそんな台詞を吐かれると、私はまたもやドキドキしてしまうのだった。

梓さんは長野県出身で、東京の短大で小学校教員の免許を取ると、堀ノ出学園初等科に就職した。短大在学中の旅行以来北海道フリークとなっていた彼女は、学園の実験場進出が決まった時、真っ先に手を挙げて転勤に応じた。何もかもが充足していた東京から、何もかもが不便で好きな服も着られない実験場に放り込まれた時、最初は戸惑ったものの、「この質素な生活と厳しい環境こそが人間の真の生き方」と、前向きに受け止めて今日まで過ごして来たのだった。札幌市の隣、北広島市に短大同期の知人が住んでおり、渡道後は頻繁に往き来していた。

同僚教諭曰く、梓さんの口癖は「平和ボケしてんじゃないわよ。」で、実験場内の不都合に不平不満を言う者が身近に現れると、相手が子供だろうが大人だろうが、「モノが溢れている平成の世の中を少しは忘れなさい。」と、諭すことに使命を感じているらしかった。

また、彼女は定期的な経過報告と、迅速な結果報告を重視していた。イベント準備の進捗状況の経過報告が遅れようものなら、児童が下校した後に実験場本部へ乗り込んで来た。

「ガチャ藤さん、おとこの夕方を最後に、定時連絡が無いじゃないですか。」

自分の歯並びは隠したがるのに、イベント企画室の面々の前で「ガチャ藤さん」呼ばわりはきついと思っただが、経過報告を怠ったのは事実なので、言い訳をした。

「ごめんね。あんまり順調に進んでるんで、特に報告する内容が無かったんだけど。」

「順調だったら、『今日の分の準備作業は、無事終了』って、一言だけでも言ってくればいいんですよ。こっちは、産技伝さんの準備の様子なんか、全く分かんないですよ。」

八重歯剥き出しで怒る顔も、なかなかチャームングだ。が、職場に居座られても業務に支障を来たすので、翌日以降は最低でも一日一回の定時連絡を必ず入れるから、と約束して帰ってもらった。

「彼女が『八重歯ちゃん』か。それにしても、『ガチャ藤さん』って呼ばせるなんて、斉藤ちゃんもスミに置けないねえ。」

応接スペースでお茶をすすっていた伊部担当課長が、ニヤニヤしながら課長席に戻って行った。

夏休み中も終わりに近い八月二十二～二十四日、上野高等女学校と下谷桜丘国民学校をメイン会場として、堀ノ出学園と産技伝の合同イベント、苦北堀ノ出学園祭が開催された。期間中は多くの場内滞在者で賑わい、イベントは成功裏に終了した。しかし、梓さんは連日夜遅くまで続いた渾身の準備作業がたたって熱を出し、学園祭期間中は寮で寝込んでいた。私は、彼女に毎晩、電話で「本日も無事終了。」と、結果報告をしておいた。寮へ見舞いに行くのはさすがに気が引けた。

二学期が始まり、梓さんの体調が回復してから、挨拶がてら苦北下谷小学校を訪問した。この時、彼女は授業中で直接会えなかったが、校長先生から、彼女が書いた私宛の手紙を頂いた。封筒の中には手書きの便箋が一枚入っており、

「学園祭期間中は、私の不注意で体調を崩してしまい、申し訳ありませんでした。」

こんな不届き者の私のために、毎日定時報告を下さって、本当にありがとうございました。

ガチャ藤様におかれましては、これからも私こと“魅惑の口元”を、よろしく盛り立てて下さいませ」

と書かれ、更に「下さいませ」の末尾には、ハートマークが描かれていた。それにしても、「魅惑の口元」とは恐れ入った。

「ちよつと、先生。お願いですから、そんなに難しい顔しないで下さい。」

苫北下谷校舎に近い、下谷区車坂町に店を構える車坂写真館の主人、高野氏は、梓さんの例の引きつった「笑顔」に困惑していた。

実験場内での映画口ケが一旦終了し、国民服やモンペの着用義務がなくなったので、産技伝統制御部は、その年の十月一日の衣替えを機に、服装等の外装制限を一時休止すると通達していた。堀ノ学園の場内各校では、クランクアップの記念写真を、教諭も児童も戦時中の身なりのまま、学級別のモノクロ集合写真を撮った。撮影は校舎をバックに行われ、私も立ち会った。

高野氏は、時代背景が暗いだけに、戦争中はほとんど見られなかった、笑顔で埋め尽くされた集合写真を撮りたいと考えていた。各クラスが昇降口の前に並び、笑顔、笑顔、また笑顔で次々に撮影を終えた。ところが、松本梓先生率いる二年二組でつまずいてしまった。児童は問題なかったが、教諭の笑顔が全く画になら^えない。口を力一杯閉じたままカメラを睨みつけるその表情は、自然な笑顔から程遠かった。高野氏は、梓さんが微笑むよう、言葉巧みに誘導しながら三回シャッターを切ったが、彼女の硬い表情はついに崩れなかった。高野氏は、とうとう音を上げた。

私が高野氏に「笑顔を無理強いしなくても」と言いかけた時、私よりも事情を分かっている児童たちが、はやし立て始めた。

「先生、写真に撮られたからって減るもんじゃなし、普通に笑いなよ。」と、無責任に意見する男児もいれば、「写真がよその人に見られて、先生がお嫁に行けなくなっちゃったら、どうやって責任取んのよ。」と、擁護する女児もいた。

小さな言い合いがクラス全体に波及する寸前、級長の西脇大輔が一同を制して声を上げた。

「先生、俺が責任取るぞ。いつでも嫁に來い。」

やはりここは芸達者な子役が揃っている小学校。二年生と言えども口の利き方は大人並みだった。

「こらっ、大輔、浮気すんじゃないわよ。あたしとの誓いはどうすんのさ。」

大輔の隣で成り行きを見守っていた、赤いセーターの女児が真顔で突っ込みを入れると、その場の児童全員が笑った。それまで必死に口を閉じていた梓さんも、思わず吹き出して口元が緩んだ。

「ああ、いい顔だねー。」

高野氏はようやく訪れた絶好の瞬間に安堵し、笑顔でリリースを握り直した。乾いたシャッター音が昇降口の前に響いた。

「あちゃー、一生の不覚。」

シャッターが切れた次の瞬間、梓さんが素つ頓狂な声を上げ、撮り直しを猛烈に懇願し始めた。

「高野さん、もう一枚撮ってくださいませんか。お願い、お願いです。」

「いや、これで勘弁して下さい。フィルムが無くなっちゃいます。それに、せつかくいい画えが撮れたんですから。」

高野氏が困った顔で断ると、大輔もそれに加勢した。

「先生、写真屋さんをあんまり困らすんじゃないやねえよ。せつかくオケーが出たつてのによ。」

「だって、私は嫁入り前よ。」

小学生を相手に必死に食い下がる梓さんに、大輔がとどめを刺した。

「ガキと一緒にの記念写真なんか、見合い写真になんねえよ。いいじゃんか。」

一体どこで「見合い写真」なんて言葉を仕入れたのか。ここまで言われては、諦めるしかなかった。笑顔から一転、すっかり気落ちした梓さんは、女兒らに慰められながら教室へ戻った。

梓さんが交通事故に遭ったのは、その翌日だった。北広島市内の知人宅を尋ねた帰りの彼女が、交通量が多い薄暮の国道の交差点で左折した大型トラックに巻き込まれたのだった。歩行者用の信号機が青点滅を始めた直後で、電車の時刻を気にして駅へ急いでいた彼女は、一瞬の躊躇の後、急に横断を始めたらしかった。当時、彼女は場内服の定番だったモンペズボンを穿いており、比較的動きやすいその服装が、無謀な判断をさせたのかも知れなかった。救急車は間もなく到着したが、厳しい状況であることは誰の目にも明らかだった。

顔面や両手は擦り傷だらけ、おまけに大量出血で薄いピンクのブラウスを赤黒く染めた梓さんは、救急車の寝台の上で弱々しくつぶやいた。八重歯が折れ、口の中も血だらけだった。

「あーあ、失敗しちゃったな。」
救急隊員がたしなめる。

「ハイ、あんまり喋らないで。もう直ぐ病院に着くから。」

救急隊員の言葉が聞こえたのか、聞こえてないのか、梓さんは救急車の天井の一点をぼんやり眺めながら、虫の息で続けた。

「そうだよねえ、ここは、車が少なかった戦前の下町じゃないんだよね。道路に沢山の凶器が走り回る、平成の世の中だったんだよね。」

ここまで喋ると静かに目を閉じ、深く大きな溜め息をついた。

「平和ボケしてたな。学校みんなに、偉そうなこと言えないよね。」

これが最期の言葉だった。梓さんは、そのまま二度と目を開けな

かった。

梓さんは北広島市内の病院へ運ばれ、死亡が確認された。亡骸は実験場へ戻ることなく、長野県内の実家へ引き取られて行った。

その二日後、車坂写真館から苦北下谷校舎とイベント企画室へ、でき上がった集合写真が届けられた。モノクロで仕上げられた二年二組の写真の中央には、国民服やモンペの学童に囲まれてはにかむ、松本梓先生の姿があった。そして彼女が危惧したとおり、満面の笑顔、笑顔、笑顔の真ん中に、「魅惑の口元」がくつきり写り込んでいた。彼女の実家に写真を送った後、「梓の成人後に撮られた記念写真で、口を開けて笑っているのは、これ一枚だけです」との返事が御両親から届いた。

私は、実験場が完成した今でも、堀ノ出学園絡みのイベントが開催された日の夜には、子供と嫁さんが寝静まっただけからこの写真を引っ張り出す。そして、あの頃のと きめきをほろ苦く思い出しながら、梓さんの魅惑の口元に「本日も無事終了」を報告している。

(後書き)

このお話と同じ内容で、梓先生が死なないバージョンを、当サーバ様内の短編集「女と男の実験場」(「<http://ncode.syosetu.com/n1190x/>」)に収録しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5946v/>

梓（あずさ）先生の記念写真 ~ 残念な結末バージョン ~

2011年10月9日11時46分発行